

井戸の茶碗

野村胡堂

一

「フーム」

要屋かなめやの隠居山右衛門は、芝神明前のとある夜店の古道具屋の前に突っ立ったきり、暫くは唸うなっておりました。

胸が大海の如く立ち騒いで、ボーツと眼が霞かすみますが、幾度眼を擦こすって見直しても、正面の汚い台の上に載せた茶碗が、運の悪い人は一生に一度見る機会きかいさえないと言われた井戸の名器で、しかも夜目ながら、息づくような見事さ。総体薄枇うすび杷色わいろで、春の曙あけぼのを思わせる釉うわぐすりの流れ、わけても轆轤ろくろめ目の雄麗さに、要屋山右衛門、我を忘れて眺め入ったのも無理はありません。

「それは売物か」

山右衛門は恐る恐る訊いてみました。どう間違っても、これは大道の夜店などに曝さらし物になる品ではなかったのです。

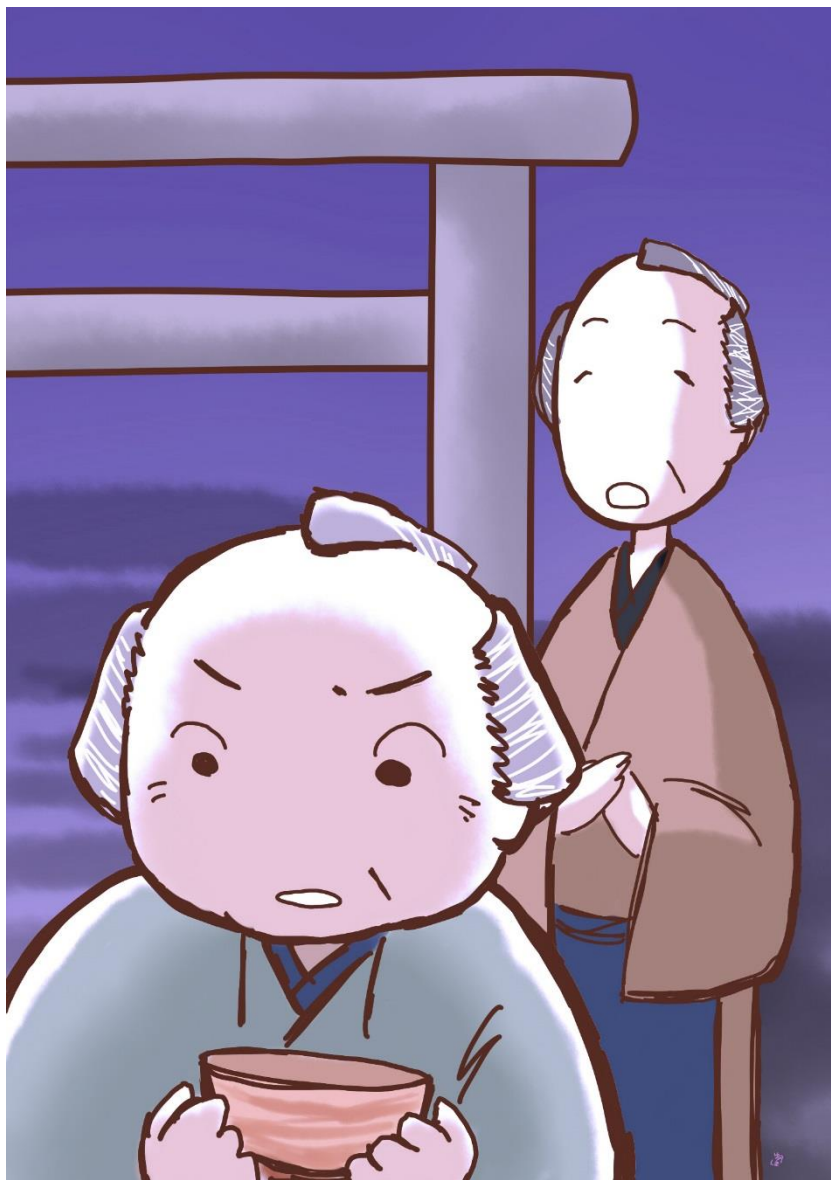
「へエー」

古道具屋の親爺はボケ茄子なすのような顔を挙げました。

「ちよいと見せて貰えまいか」

要屋山右衛門はとうとう古道具屋の筵むしろの前に踞しゃがみ込んでしまいました。薄湿うすじめりの夜の大地の冷えが膝に伝わりますが、無造作に出された茶碗を手にすると、心身に一脈清涼の気が走って、改まった茶席つちなに列ったような心持になります。

手に取って見ると十善具足しんしょうの名器で、茶に凝っている要屋山右衛門などは、一と身上しんしょう投げ出しても惜しくない気になる品物です。



「頼まれた品でございますよ、旦那」
客の筋が尋常ならずと見て、古道具屋の親爺も少し乗出ししました。

「箱や袋はないのかな」

「それが揃っていれば、大道へ出る品じゃございません、へエー」
親爺もさすがに心得ております。それに内箱外箱、御袋など一通り揃っていると、これは大変なことになります。

「いくらに売る気だ」

山右衛門は気を引いて見るような調子で恐る恐る訊きました。
「少しお高うございますよ。頼んだ方は五十両に売ってくれと申しますが」

古道具屋の親爺もそこまでは眼が届かない様子です。

「えッ、五十両？」

「だから私は、そんな無法なことを言うのは嫌だと断ったんで、夜店の品で五十両は少し桁けたが外れますが――」

「いや、高い安いを言っているのではない、五十両なら私は買おう。が、縁日を冷かすのに、そんな大金を持っているわけではない。すぐ家へ取りに行つて来るから、誰にも売らないようにして貰いたい」

「へエへエそれはもう」

「これはほんの少しだが、今晚一と晩だけの手付けのつもりで預けておく。いいかえ」

山右衛門は懷ろから財布を出して小判で三両ほど置くと、大急ぎで引返しました。

茶道に遊ぶものの冥利みょうり、一度は手に入れたと思った井戸の茶碗が、こんな機縁で、たった五十両で手に入るというのは、全く夢のようです。あの茶碗に附属物一式揃そろっていたら、五百両とか千両とかいう相場が付いて、大名の蔵か三井鴻池こうのいけといった大町人のところに納まるものでしょう。

それがたった五十両で手に入るとは、何という幸運でしょう。この秋はあの茶碗の披露で一席催おもてし、知っている誰れ彼れを驚かせてやろう。

そんなことを考えながら、浜松町の路地を入って、ハタと当惑しました。三年前から養子の山之助に店を譲って、ここの奥の隠宅に引っ込んだ山右衛門は、無用心さを考えて手許に十両と纏まとめた金を置かなかったのです。

「弓、お弓はいるか」

「ハ、ハイ」

少しあわてて飛んで出たのは、お弓といって十九の娘。要屋の遠縁の者で、行儀見習いに来ているのを、隠居が気に入って、この隠宅の方に引取って、下女のお仲とともに朝夕の世話をさせているのでした。

「誰か来ているのか」

「いえ、あの」

お弓は吃どもりました。本宅の手代で久吉というのが、これも遠縁で要屋に引取られているうち、不仕合せ同士のお弓と心易くなつて、ツイ人目を忍ぶ仲になったのを割かれ、間がな隙がな、隠宅を覗いているうち、隠居が神明様の夜店へ行った留守、ちよつと滑り込んで、お弓と話し込んでいたのです。

「夜店で飛んだ掘り出しものを見付けてのう。——大名物と言つてもいいくらいな井戸の茶碗が、たった五十両だとさ。——あんな品に逢うのは、人間一生に一度の福運だ。店へ行つて金を持つて来て買おうと思う——留守を頼むよ」

隠居山右衛門は金持らしく人の思惑おもわくなどを考えずに、自分の言いたいだけのことを言つて、そのまま路地の闇しにせに引返しました。そこから表通りの要屋——海道筋の老舗で、代々質両替をやっている店までは、ほんのひと走りだったのです。

「チェツ、馬鹿にしているぜ」

その後姿を、障子の隙間から見送つて、手代の久吉はおおしたつづみ大舌鼓を打ちました。

「まア、お前」

その冒瀆的な調子をとがめるようにお弓。これは隠居が戸口から引返したために、引入れた久吉が見付からなくてホツとした姿

です。

尤もお勝手には二人の仲を百も承知の下女のお仲が、ガタピシと晩のお仕舞をしているのですから、隠居が帰って来たところで、言いのがれの口実はいくらでもあったことでしょう。

「茶碗一つが五十両だとさ。――それが安いって大喜びだ」

久吉の機嫌は以ての外です。

尤も、五十両というのは当時にしては一と身上とも言うべき大金で、白雲頭の頃から奉公して、遠縁だけにろくな給金も貰わず、せっかく狙った要屋かなめやの家督は、赤の他人の、養子山之助に取られてしまった久吉としては、いつ暖簾のれんを分けて貰う当てもないこのせつ、隠居が五十両で茶碗を掘り出した夢中な姿が、ツイ小癩こしやくにさわったものでしょう。久吉はとって二十八の、多血質で赤い顔をし、物事に容赦のならぬ男でした。

「そんなことを言わないで下さいよ。ね、久吉さん、御隠居さんは他にお楽しみがないんだから」

心根の優しいお弓は、ツイ弁解する気になるのも、無理はなかったでしょう。山右衛門はそれほどこの娘に眼をかけて、久吉のように気性の激はげしい男と一緒にするのさえ承知しなかったのです。

「お弓さんが側にいるんだ。この上楽しみがあっちゃもったいないぜ」

「あれ、お前」

「世間じゃ変なことを言ってるぜ。気を付けるがいい」

久吉はプイと立ちました。フト隠居の山右衛門が、若くして美しいお弓を側へ置くのが、唯ごとでないように言う店中の噂を思

い出したのです。

「そんなことを、久吉さん」

「俺は帰るぜ。せいぜい御隠居さんに可愛がって貰うがいい」

「あれ、久吉さん」

追いつがるお弓を払いのけて、久吉は外へ飛び出しました。生温かい青葉の風が頬を撫でて、何んとはなしに興奮を誘う晩です。

二

それから暫く下女のお仲は、泣き入るお弓の相手ですごしてしまいました。三十を越した出戻りのお仲は、お弓の素直さが気に入って、主人の留守には姉妹のように慰め合っていたのです。

「久吉さんはあんたにポンポン言うけれど、明日になれば後悔するに決っているよ。あの通り正直者だから、考えたことを口に出さずにはいられないんだね。——それがまた御隠居様の氣に入らないのさ」

そんなことを言うお仲の声と、シクシク泣くお弓の声がしばらくは格子の外まで洩れておりました。

「御隠居様が、少し遅いようね」

お仲はフトそんなことに氣が付いたのは、久吉が帰ってから四半刻はんとぎ（三十分）も経ってからのことです。

「そうね」

お弓はようやく乾いた顔をあげました。

「ちよいと、神明前まで行って見ようかしら」

氣の早いお仲はもう立ち上がって支度をしております。

浜松町の路地を出て、要屋の店の前を、神明の方へ行ったお仲は、近道をして路地へ入ると、そこに大変なものを見掛けたのです。

「人が死んでるとよ」

「何？」

「路地の中で、人が殺されているとさ」

どっと流れる人波、押されるときもなく行つて見ると、月の隈もない路地の中程、隠居の山右衛門は脇腹わきばらをえぐられて血潮の中に息が絶えているではありませんか。

それよりもお仲を驚かしたのは、寄つて来た弥次馬の中に、チラと手代久吉の顔を見たことです。

「あ」

声を掛けようと思うと、久吉はもうどこかへ行つて姿を隠してしまいました。

その間に町役人、土地の御用聞、神明様の縁日でちょうど出役していた同心などが集まり、見知り人を浜松町の要屋に走らせて、月の路地の中ながら、取調べが始まります。

要屋の養子山之助は驚いて飛んで来ました。年の頃、二十七八、分別者らしいうちに愛嬌おおだながあつて、大店の主人の貫禄は充分です。

「お前は？」

「要屋の主人山之助でございます」

「殺されたのは、お前の養父に相違あるまいな」

同心浦辺吉十郎は一拳に事件を片付けるつもりか、テキパキとことを運びます。

「ハイ」

山之助は死骸の上に痛々しく眼を落しました。

「^{うらみ}怨を買うようなことはないのか。――日頃隠居をよく思わないと言ったような」

「飛んでもない。――父親のことをそう申しては何んですが、仏のような心掛の人でございました。店の者、御近所の衆にお訊き下さっても解ります」

「他に思い当ることはないのか」

「たった一つございます」

「何んだ」

「何にか結構な掘り出し物があるからと申しましてツイ先刻店から小判で五十両ほど持って参りました」

そう言い終る山之助の言葉も待たず、御用聞の金杉の竹松は、死骸へ飛び付くように調べましたが、小判は愚か^{おろ}財布の中に小粒も残ってはいません。

「ありませんよ、旦那」

「よしよし。それも一つの手掛りにはなろう」

「それからちよいとお耳に入れたいことがあります」

竹松、浦辺吉十郎に囁きました。

「何んだ」

「手代の久吉が、隠居を怨んでいたと店の者が申しますが」

「それをつれて来るがいい」

「どこへ行ったか見えません」

「フーム」

「死骸を見付けて大騒ぎになった時、確かに人ごみの中にいたという者が二三人ありますが」

「その野郎だ。ぬかるな、竹松」

「へエ」

金杉の竹松は、獲物を嗅ぎ出した獵犬のように飛びました。

三

お弓が伝手から伝手を求めて、銭形平次を訪ねて来たのは、それから三日目でした。

「親分さん、こんなわけで、とうとう久吉どんは縛られてしまいました。——平常から遠慮のない人で、ツイ言わなくても済むことを言って、主殺しの大罪人にされては可哀想でございます。どうぞ助けてやって下さい。お願いでございます」

涙ながらに拝むお弓を見ると、尻の重い平次もツイ、この事件に飛び込んで見る気になるのです。

「親分、こいつは底も蓋もありそうですぜ、行ってみましょう。金杉の竹松親分には悪いが、放って置いちゃ可哀想だ」
ガラッ八の八五郎までがこんなことを言うのです。

「その晩久吉がお前のところにいたことは、お仲が知っているだけなんだね」

「え」

「そいつは誰にも言わなかったのか」

「言えば久吉どんが、ますます疑われるばかりですもの」

「それが素人料簡というものだよ。——物事を隠して一つも良いことがあるわけはない」

「でも」

「隠居のあとからすぐ外へ出たから、弁解いいわけが立たないというのか」

「お前と別れてから、路地の死骸の側へ行くまで、ざっと四半刻（三十分）の間どこで何をしていたか。それさえ判れば久吉の疑いは晴れるわけだ」

「それを言わないそうでございます」

「よしよし何にかわけがあるだろう。若い者は飛んだところで依え怙こじ地になるものだ」

平次はどうとう御輿をあげました。ガラッ八と一緒に、何より先に殺された現場へ行って見ましたが、両側は堀へいになっていて、四方あたりの家が思いのほか遠く、何にか言い争いがあったにしても、雨戸を締めていたら、うっかり知らずに過したかも知れません。念のために訊いて廻るうち、いきなり悲鳴に驚いて飛び出して見ると、月下の路地の中に、脇腹を短刀で刺されて、要屋かなめやの隠居は倒れていたというのです。

尤も最初に駆け付けた近所の衆の話では、その時はまだ息があつて「茶碗」「茶碗」と言ったというのですが、金杉の竹松はその意味を追及しようともせず、いきなり久吉に眼をつけて縛つたというのでした。

久吉の身持は、お弓というものがあつたせい、か、店中でも堅い方で、貯蓄らしいものもほんの二三両はあります。尤も、要屋で聴くと、決して香かんばしい方ではなく、他家から入って家督に直った主人の山之助などは、口を極めてという程でなくとも、こと毎に久吉の陰険さをほのめかします。

最初の手段は、まだ八丁堀に留められている久吉に逢つて、隠

宅を飛び出してから、路地の死骸の側へ来るまでの四半刻（三十分）をどこで過したか聴く外はありません。

これも併し平次の失敗でした。久吉は平次のことをわけての理解にも耳を塞いで、頑強にそれを拒みつづけるのです。

「久吉が他に言い交した女でもないのか。お弓の手前、言いそびれているんじゃないか」

平次はそんなことまで考えましたが、ガラッ八に洗わせた結果は、お弓に熱中した久吉は、他の女などを振り向いても見なかったという証拠が、際限もなくあがつて来るだけ。これも見事に当てが外れました。

「この上はたった一つ。——お前の口から訊いてくれ。黙りつづけていると、俺にしても言訳がないものと思ひ込んでしまう。こんなことで伝馬町へ送られると、取返しが付かなくなる」

平次が心配するのはそれでした。久吉は気性の激しい男ですが、主人を殺すような悪党とは見えません。が、これだけ証拠が揃った上、下調べが済んで奉行所のお白洲に引出されると、あとから反証をあげるのに骨が折れます。

「参りましょう、親分さん」

お弓は久吉に逢える喜びで一杯でした。

八丁堀の組屋敷へ行つて、係りの与力に事情を話し、その許しを受けて、とにかくにもお弓を久吉に会わせる手順だけはつきました。

「俺は立ち会わない方がよからう。——拔りもあるまいがこいつは久吉の命に関わることだ。隠宅を飛び出してから四半刻（三十分）の間、どこにいたか、そいつを訊くんだぜ」

平次に念を押されながら、お弓はいそいそと番屋の中へ案内されて行きます。その後からそつと跟ついて行く八五郎、これは平次の目顔の指図を受けて、二人の話を聴くためです。

やや暫くすると、

「ああ、やりきれないぜ。親分」

汗を拭きながらガラッ八が帰って来ました。

「どうした八」

「どうにもこうにも、泣いたり笑ったり、口説くどき立てたり、すねたり」

「そんなことはどうでもいい。——あの四半刻（三十分）はどうしたんだ」

「へッ、それがね、親分。へッ」

「何をニヤニヤしているんだ」

「極りが悪くて言えなかったわけですよ。——久吉の野郎はお弓に会いたさに、隙ひまさえあればフラフラ隠宅へやって行くが、隠居が大目玉を光らせているから、大っぴらに顔を見るわけに行かねエ」

「そんなことはどうでもいいよ。肝腎かんじんの——」

「へエッ、銭形の親分もこの道ばかりは御存じがないから可笑しい」

「何を言うんだ。馬鹿野郎ッ」

「馬鹿野郎の株は久吉ですよ。隠宅の隣の空家に忍んで、蔭ながらお弓の様子を見ているんですって。こいつは驚くでしょう。親分」

「フーム」

「あの晩も腹立ち紛れまぎに隠宅を飛び出したが、お弓の泣いているのが気になって、隣の空家に入って、そつと様子を見ていたというから甘えもんでしよう」

「それはたしかか」

「久吉は、あの晩自分が飛び出してからのお弓とお仲のやり取りを一言半句残らず知っていますよ。いやはや、その馬鹿馬鹿しいということとは」

「もういい、八」

「どうしました親分」

「それが本当なら俺は振り出しからやり直した。大変なことになったぞ、八。お前も考えてくれ」

平次は深々と腕こまぬを拱くのでした。

四

「親分、するとどういうことになるでしょう」

ガラッ八は鼻の穴を大きくするだけのことで、大した思案が浮びそうもありません。

「茶碗の方から当って見る外はあるまい。神明様の夜店の地割はどこですか、訊いて来てくれ。それから、その井戸とかお濠とかの茶碗を持っていた道具屋を突きとめるんだ」

「そんなことならわけはありません」

ガラッ八は飛び出そうとするのです。

「待ってくれ、お前を待っているのも気がきかない。俺も一緒に行こう」

お弓の始末を人に頼んで、平次とガラッ八は芝に向いました。手順をふんで、古道具屋を探し当てたのはその日の夕方。新網の裏長屋に、長兵衛という名前だけは強そうなボケ茄子なすのような親爺を訪ねると、

「あ、あの茶碗ですか。あれはもう返してしまいましたよ。夜店へ出して五十両じゃ、売れる道理はありません。あんなのを年に二つ三つは手掛けますが、みんな偽物ですよ。ヘッヘッ」

そんなことを言って、慾が深そうにヘラヘラと笑うのです。

「返したというと、どこへ返したんだ」

「あれは私が買い取ったのじゃありません。また私風情が三十両五十両という品を買えるわけもございません。五六日前店を並べているところへ、いきなり若い娘さんが来て――」

「若い娘？」

「ヘエ、目のさめるような娘でしたよ。――身装みなりは悪かったが、あんな綺麗なのは、神明にも狸穴まみあなにもありません」

「それがどうした」

「大事の品だが、どうしてもお金に代えなきゃならない。箱や袋が揃っていれば、三百両にも五百両にもなる。茶碗だけでも見る人が見たら、百両にも二百両にもなるだろうが、大道でそんなことを言っても通用しないだろうから、せめて五十両に売ってくれ。売れたら十両までお礼を出すという話で、ヘエ」

「それから」

「大して店塞みせふさぎになる品でもございません。売れて十両の口銭なら悪い商売じゃないと思って、七日ばかり並べて置きました」

「客が付いたのか」

「毎晩二人三人はきつと目をつけますが、値段を言うときそれつきりになります。その中で、手付けを置いたのが二人」

「どんな様子の人間だ」

「一人は六十五六の立派な御隠居で、すぐ引返してくると言っただけつきりになり、その次は三十七八の古道具屋の手代といった様子の男でしたが、これも一両の手金を置いて行ったきり、二日経っても品を取りに来ません」

「フーム」

「そのうちに茶碗を預けた娘さんが来て、どうやら金の都合がつくようになったから、茶碗を返してくれ——と。こんどは立派な箱を持って来て、それへ入れて持って帰りましたよ。十両の口銭は取り損ねましたが、手金が二度に四両も入りましたから、まあ良い商売で——」

「立派な箱を持って取りに来たのだな」

「へエ。内箱は桐の白木で、外箱は塗ぬりがありました。袋は緞子どんす——」

「箱や袋が揃えば、五百両もすると言ったな」

「へエ。——私じゃ眼は届きませんが、その娘さんが確かにそんなことを言いました」

「来いッ、親爺」

「へエ」

平次の言葉の激しさに、長兵衛は、ハッと立ち竦すくみました。

「素姓人別も判らない者から、そんな大事な品を預かって済むと思うか。叩けば埃ほこりの出る野郎だ、来いッ」

平次に手首をグイと掴まれて、親爺は一ぺんに悲鳴をあげたの

です。

「あッ、親分。そいつは殺生だ。私は何んにも知りません。お許しを願います」

「知らないで済むと思うか。縛られるのが嫌だったら、その娘の家を捜し出せッ」

「親分」

「八、構うことはない。存分に縛り上げろ、そいつは贓品けいず買いだ」

「野郎ッ」

八五郎が飛び付き様、滅茶滅茶に縛り上げたことは言うまでもありません。

「謝まった、親分。言いますよ、皆んな申上げますよ」

ボケ茄子の長兵衛は、他愛もなく兜かぶとを脱いでしまいました。

その白状によると、娘が井戸の茶碗を持って来たことも事実、素姓も家も教えなかったことも事実ですが、見掛けよりも賢いような長兵衛は、最後に茶碗を受取って帰る娘の跡をつけて、その家突き留め、その入口に坐り込んで五両という口留料をせしめて来たというのです。

「太い奴だが、次第によっては許してやる。案内しろ」

「へエ——」

否いやも応もありません。平次とガラッ八は長兵衛を引立てて源助町まで飛びました。今度こそは一挙に事件の謎が解けそうです。

五

平次の意気込みを裏切って、そこに待っていたのは失望だった

のです。

訪ねて行ったのは源助町の裏長屋で、見る影もない貧しい調度の中に二十一二の——娘というにしては少し臺^{とう}が立ちましたが、この上もなく上品な女がたった一人、淋しく暮しているのです。平次とガラッ八は飛び込みざま茶碗のことを訊くと、

「やはり知れましたか、——それでは何も彼^かも申し上げます。お聴き下さいまし」

娘の話は長いものでしたが、かいつまんで言うと、この娘はお袖と言つて、兄の彦太郎と二人は、大阪の名ある大町人の子に生れ、曾^{かつ}ては人にも羨^{うらや}まれる栄華も見ましたが父親が骨董^{こつどう}に凝りはじめ、巨万の身上を費い果し、死んだ後に残ったのは、おびただしい偽物の骨董とそれから身に余る借金だけというみじめな有様でした。

二人の遺児は、偽物の骨董を全部叩き売り、たった一つ残った——こればかりは真物の、井戸の茶碗を抱いて江戸に下り、それを売つて身を立てる代^{しろ}にするつもりでしたが、骨董屋は兄妹の頼る者もない薄倖につけ込み、その足許を見て恐ろしく踏み倒し、仲間が連絡して兄妹を屈伏させにかかったのです。しかし兄の彦太郎はきかん気の男で、骨董屋に最後通牒を叩き付けて談判を打ち切り、無理に妹を説いて、それを夜店の古道具屋に預け、裸の茶碗を眼のきく人に五十両くらいに売り付け、その後で箱や袋などの付属品を持込んで、せめて二百両なり三百両なりの纏^{まと}まった金にしようという、不思議な詭計^{きけい}を思い付いたのです。

が、二度とも手金流れになつて、茶碗は幾日経つても売れそうもありません。強気の彦太郎もいよいよ江戸には縁がないものと

諦めて、古道具屋から茶碗を取り上げ、それを持って、もう一度故郷の大阪へ行ったというのです。

お袖は取って二十一、留守の兄彦太郎は二十八、臍^{ろう}たく美しく育って貧しさに虐^{しいた}げられながらも、人などを殺せそうな人柄でないことは平次にもよく判ります。

「では一つ訊きたいが、四日前の――あの神明様の縁日の晩、兄とお前はどうしていたんだ」

平次は最後の問いを投げました。

「あの日は兄といっしょに板橋の親類へ身の振方の相談に参り、遅くなって泊ってしまいました」

「――」

平次は黙って引下りました。その日のうちに板橋へ下っ引を走らせると、彦太郎とお袖兄妹はあの晩板橋で過したことは疑う余地もありません。

「さあ困った」

平次は何時にない迷宮に入り込んでしまったのです。

「親分、手代の久吉は許されましたよ」

ガラッ八がこの報告を持って来たのは翌る日でした。

「どうして無実と解ったんだ」

「お弓と話したのを聴いたのは、あっしばかりじゃなかったんで」
「なるほどな。壁に耳ということを忘れていたよ。ところで、久

吉は店へ帰ったのか」

「一度は店へ帰ったが、いや気がさしたもののか、暇を取って在所の調布^{ちようふ}へ帰ったようですよ」

「フーム、御苦労だが、八」

「何んです、親分」

八五郎に御苦勞などはありません。

「調布へ行って、久吉がどんな様子で帰ったか調べてくれ。五十両と纏まとまった金を持っているようなら、構わず縛って来い」

「大丈夫ですか、親分」

「俺は少し考えたことがある」

八五郎を調布へやると、平次は、もう一度芝へ行きました。浜松町から神明一帯を訊いて廻って、久吉が日頃手なずけて居るといふ、少し人間のおめでたい樽拾たるひろいの三次という少年を捜し当てると、

「さア、みんな言ってしまう。お前は要屋かなめやの手代に何を貰った」

こんな調子でトントンと白状させてしまいました。それによると、久吉は三次に小錢をやって手なずけ、隠宅の隣の空家から見張らせて、隠居の山右衛門の留守を狙って出入りしたばかりでなく、山右衛門の殺された神明の縁日の晩は、自分が飛び出した後、三次をつれて来て空家から隠宅を見張らせ、一から十まで報告させて、巧たくみに現場ア不在証明リを拵イえあげたと判ったのです。

×

×

ガラッ八が手代久吉を調布から縛って来たのはその翌る日でした。在所へ帰ってすっかり気を許した久吉は、百両あまりの金を見せびらかして、土地の人に大尽風を吹かせていたところへ、江戸の御用聞の八五郎が踏込んだのです。その金の中に、要屋があので晩隠居に渡した五十両が、包も解かずにあつては、申訳が立ちません。

「どうしてあんなことが解りました、親分」

何事も済んだ後で、ガラッ八は例の絵解きをせがむと、

「空家に久吉がいたというから、話がわからなくなったのさ。空家に代りを入れて、自分は外で細工さいくをする手のあることを忘れていたんだ」

平次は面目次第もない顔をするのです。

「お弓は可哀想ですね」

「可哀想だが仕方があるまい、女は悪い男にかかり合いをつけると一生の災難だ。久吉はちよつと正直そうな顔をしているが、あんな悪い奴はないよ。自分のことしか考えない人間ほど恐ろしいものはない。一寸見ちよつとは正直そうだが、腹の中は鬼だ」

「お袖兄妹はどうなったでしょう」

「俺はあの彦太郎も怪しいと思うよ。あんな細工をしたのは、茶碗を買いに行く人間の跡をつけて、途中で金を盗るつもりだったのかも知れない。五百両もする品を五十両で売るというのは変じゃないか」

「でも」

「あの妹のお袖は善人さ。女も美しい氣立ても申分はないようだ。が、兄のことまではわかるものか。現にちようどあの頃、狸穴まみあなの骨董屋の手代で、五十両剽盗に取られたという訴えが出ている」

「へエ——」

「でも、俺はそこまで詮索せんさくする気がなかったよ。土地の御用聞に任せて置くことだ。——あの兄妹はよくよく骨董こつとうに凝る人間が憎いようだから」

平次は、そう言って八五郎のうさんな顔を見やるのでした。骨董が憎いなどという心持は、八五郎の心理学にはないことです。

それどころか、このとき八五郎の心をパイ埋めているのは、お弓の泣き濡れた姿と、それをどう慰めたものかと思うことだけだったのです。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十七年五月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第七卷 河出書房 昭和三十一年八月五日初版

編集・発行 錢形俱樂部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>